

くらしの中で読む『正法眼蔵』

— 面授の巻 — その二

成興寺住職 小倉玄照

〈本文〉

この面授の道理は、釈迦牟尼仏しやくかむにぶつのあたり迦葉しやうがつの会下えいかにして面授し護持ごぢしきたれるがゆゑに、仏祖面なり。仏面より面授せざれば諸仏にあらざるなり。釈迦牟尼仏しやくかむにぶつのあたり迦葉尊者かしょうそ者をみるみること親付しんぷなり。阿難・羅睺羅らかうらといへども、迦葉の親付におよばず。諸大菩薩しよたいたくさつといへども、迦葉の親付におよばず。迦葉尊者の座に坐することえず。世尊と迦葉と、同坐し同衣しきたるを、一代の仏儀とせり。迦葉尊者かしょうそしたしく世尊の面授を面授せり。心授せり、身授せり、眼

授せり。釈迦牟尼仏しやくかむにぶつを供養恭敬くきやうくわんけい、禮拜奉觀らいはいぶくわんしたてまつれり。その粉骨碎身こなつちり、いく千万變いくせんまへんといふことをしらず。自己の面目は面目にあらざ、如来の面目を面授せり。

釈迦牟尼仏しやくかむにぶつ、まさしく迦葉尊者かしょうそをみます。迦葉尊者かしょうそ、まのあたり阿難尊者あなんそをみる。阿難尊者あなんそ、まのあたり迦葉尊者かしょうその仏面を禮拜す。これ面授なり。阿難尊者あなんそこの面授を任持じんぢして、商那和修しやうなわしゆを接して面授す。商那和修尊者しやうなわしゆそ、まさしく阿難尊者あなんそを奉觀ぶくわんするに、唯面与面ゆいめんよめん、面授し面授す。かくのごとく、代代嫡嫡の祖師、ともに弟

子は師にまみえ、師は弟子をみるによりて面授
しきたれり。一祖一師一弟としても、あひ面授
せざるは仏仏祖祖にあらず。たとへば、水を朝
宗せしめて宗派を長ぜしめ、燈を續して光明つ
ねならしむるに、億千万法するにも本枝一如な
るなり、また啐啄の迅機なるなり。しかあれば
すなはち、まのあたり釈迦牟尼仏をまぼりたて
まつりて、一期の日夜をつめり。仏面に照臨せ
られたてまつりて、一代の日夜をつめり。これ
いく無量劫を往来せりとしらず。しづかにおも
ひやりて随喜すべきなり。

釈迦牟尼仏の仏面を礼拝したてまつり、釈迦
牟尼仏の仏眼をわがまなこにうつしたてまつ
り、わがまなこを仏眼にうつしたてまつりし、
仏眼睛なり、仏面目なり。これをあひつたへて、
いまにいたるまで一世も間断せず面授しきたれ
るは、この面授なり。而今の数十代の嫡嫡は、
面面なる仏面なり、本初の仏面に面受なり。こ

の正伝面授を礼拝する、まさしく七仏釈迦牟尼
仏を礼拝したてまつるなり、迦葉尊者等の二十
八仏祖を礼拝供養したてまつるなり。

△現代語私訳▽

この面授のことわりは、釈迦牟尼仏が過去七
仏の六代目である迦葉仏の下で、親しく面授さ
れて七代目となり、それ以来大切に護り伝えて
来たわけだから、いってみれば、仏や祖師の面
をいきいきと伝えることである。仏の面から面
授しなければ、仏ではないのである。釈迦牟尼
仏が、まのあたりに親しく迦葉尊者をみられた
から迦葉尊者はそっくりそのまま仏の面となら
れた。釈尊のかたわらで待者をつとめられた阿
難尊者も、釈尊の實子である羅睺羅尊者ですら
も、迦葉尊者のびつたり一枚となった親しさに
は及ばない。もろもろの大菩薩といえども、迦
葉尊者ほどには釈尊と親密な関係とは言えない
し、もちろん釈尊との関係に於て迦葉尊者の座



著者紹介

小倉 玄照

おぐら げんしょう

一九三七年 岡山県に生まれる。一九六〇年 駒沢大学仏教学部禅学科卒業。一九七三年 曹洞宗大本山永平寺講師。著書には、『永平寺の四季』『禅と食』『新譜 勸坐禅儀講話』(いずれも誠信書房刊)等がある。現在 岡山県苫田郡加茂町 成興寺住職

よりも控えて坐らなければならない。釈尊と迦葉尊者は、同じ座に坐り、同じ袈裟を身にまとうのが、仏法のさだめである。迦葉尊者は親しく釈尊の面授を面^{かお}で受けられたのである。心で受けられ、身^{からだ}で受けられ、眼^{まなこ}で受けられたのである。釈迦牟尼仏を供養してうやうやしく敬い、ねんごろに礼拝してまみえたてまつたのである。釈迦牟尼仏にまみえるたびに徹底して迦葉尊者は自我をくたくと幾千万遍、とても数えきれたものではない。自己の面目はすっかり消えてしまつて如来の面目そのものになりきつてしまつたのである。

釈迦牟尼仏は、まさしく迦葉尊者をみられた。迦葉尊者は、同じように親しく阿難尊者をみた。阿難尊者はまた、親しく迦葉尊者に釈尊から伝えられた仏の面^{かお}を礼拝した。これが面授といふものである。阿難尊者は、この面授を持ち伝え、商那和修と出会い面授した。商那和修尊者は、

まさしく阿難尊者をみだてまつた時、面^{かお}と面^{かお}とがしつくり信頼関係で結ばれ、面^{かお}で授け、面^{かお}で受けることが行われた。このように代々の正統の祖師は、例外なく弟子は師にまみえ、師は弟子をみることによつて面授して来た。一祖といえども一師一弟たりとも、たがいに面授が行われなければ、仏でもないし祖師とも言えぬ。たとえば、水が流れて大河となり海に注ぐように、仏法が時とともに栄えるように努め、燈^{とも}を消すことなく常にともし続けて輝かせるためには、実にさまざまやり方があるし、木の本と枝先は同じ一本の木であることを忘れてはならぬ。また今まさに孵化しようとする雛が内側から殻^{から}をつつくと、母鶏^{はは}がすかさず外から殻をついて破るといふ、いわゆる啐啄^{そとく}同時の故事のような師と弟子の間の微妙な機微のことも重要である。そういうわけだから、いずれの仏祖も、まのあたりに釈迦牟尼仏を見守りたてまつりつ

つ生涯を送ったのである。寝てもさめても、仏のお顔に見守られながら生涯を過ごして来たと言つてもよい。そのようにしてはてしない永遠の過去から生まれ変わり死に変わりして今に至つたと言つてもよい。そのことをしずかに思いつつ今に生きる自分に感慨を覚えるべきであらう。

釈迦牟尼仏の（つまり仏の）面を礼拝したてまつり、釈迦牟尼仏の仏眼をわがまなこにしかと写したてまつるのであるから、わが眼はそのまゝ仏のめんだまでであり、仏の面目である。それを釈迦牟尼仏以来一代も欠かすことなく今に伝えて来たのは「面授」のおかげである。ほとけのいのちが数十代にわたつてきちんと伝えられて今に至つていふという事實は、面と面とが仏の面として向かいあったということであり、今に生きる自分は、釈迦牟尼佛そのものの面と出会つてそのいのちを受けついだということである。

ある。この正しく伝えられた仏のいのちを伝えようとする師匠を礼拝することは、まさしく永遠の過去から釈迦牟尼仏にいたる七仏を礼拝したてまつることであり、それは同時に迦葉尊者以降の二十八代にわたる仏祖の一人を礼拝し、供養したてまつることになるのである。

単伝と複伝

在家者は、なぜ「ほとけのいのち」を面受正伝出来ないのか、という点について少しふれたいおきます。

親から子、子から孫へと「人間のいのち」を伝えていく、いわゆる生物的な相続は、遺伝子の相続と申してもよいかと思いますが、有性生殖の人間の場合には、男（父）と女（母）の両方のいのちを混合して（生物学では、「染色体の交叉」というようですが）伝えていくために、例えば私（父）のいのち（遺伝子）を百%まる

ごと子に伝えることは不可能なのです。それは、次のことばで明らかです。

「ある個体の子孫は性的パートナーの子孫によつて汚染される。あなたの子供は半分のあなたでしかないし、あなたの孫は四分の一のあなたでしかない。数世代を経たときに、あなたが望めるのはせいぜい、あなたのわずかな部分をもつた、つまり数個の遺伝子をもつた多数の子孫をもつこと——たとえそのうちの幾人かがあなたと同じ名字を名乗っているにしても——である。」(R||ドーキンス『利己的な遺伝子』)

仏法の正伝面受は「単伝」ということばが象徴いたしますように、師に伝えられた「ほとけのいのち」の百パーセントを資(弟子)に伝えようとしませぬ。ところが、生物的な相続は、R||ドーキンスのことばのように、男女二人の親から一人の子へ「いのち」を伝えるのですから、いふなればファイフティーフティです。片親

のいのちの半分ずつを伝えあうわけですから、仏法の正伝面授が「単伝」であるのに対し、それを仮に「複伝」と名づけて区別してみたのです。がどんなものでしょうか。

「単伝」を目ざすためには、当然のことですが俗縁はすべて捨て去らなければなりません。

『正法眼蔵随聞記』は、その間の消息を

「学道の人、世情を捨つべきに就いて重々の用心有るべし。世を捨て、家を捨て、身を捨て、心を捨つるなり。」

「家を遁捨てして親族の境界をも捨離すれども、我が身に苦しきことを為さじと思ひ、病発しつべき事を、仏道をも行ぜしと思ふは、未だ身を捨てざるなり。」

「また身をも惜まず難行苦行すれども、心仏道に入らずして、我が心にそむく事をば、仏道なれども為^せじと思ふは、心を捨てざるなり。」

ここで強調されていることは、生物的な遺伝

子の影響を一切捨てきってしまったわけなければ師からの正伝面授は不可能だということ。その状態を『正法眼蔵随聞記』は、

「知識もし仏と云ふは、蝦蟇が蚯蚓をぞと言はば、蝦蟇が蚯蚓を、是れらを仏と信じて、日比ひごの知恵を捨つるなり。この蚯蚓をの上に仏の相好光明、種々の所具の徳を求むるもなほ情見改まらざるなり。ただ当時の見ゆる処を仏と知るなり。」

師に徹底して随順しえてこそ単伝なのだということがここでは強調されているのです。

とは申しましたが、遺伝子の影響を一切排除してしまふことは、仏道の論理からは可能であっても、実際はむずかしいことです。例えば、出家という一大事を考えてみても、両親の乳幼児期からの関わり方が遠因になればそれはありえないのですから、「単伝」も「複伝」と複雑にからみあっているのです。

釈尊の実子である羅睺羅尊者が、なぜ迦葉尊

者のように釈尊とびつたり一枚となりえないか——問題を解く鍵はどうやらそのあたりに潜んでいるように私には思えます。

それにしても師のすべてを資（弟子）に面授する、というのはすこぶる単純明快です。俗縁の一切を捨て切ることとは至難なことですが、もしそれが可能であれば、正伝の面授面稟は世俗の親子間のフイティーフイティーの「複伝」よりもよほど簡単だと言えます。理論的には、「単伝」は、無性生殖による遺伝子の相続に似たところがあるとも言えるからです。

野性の厳しさが世俗に失われ、横着本性が肥大し切って、遂には親子関係が破綻しつつある今、仏道修行における単伝のありようを参究してみることによって、かえって野性的本能的にごく自然に行われていた人間のいのちの伝承相続の方法論に示唆が与えられるのではないかという気が私はこのごろしきりにします。